

## Predicate Phraseを組み込んだ学習英文法における 非定形動詞の形態選択\*

田川憲二郎

(神田外語大学非常勤講師)

### 要旨

英語教育の場で学生に提示される学習英文法の体系には、文法現象の精緻な説明機能のある程度犠牲にしても、英語の文構造の大枠をわかりやすく伝えうる簡潔で骨太な構造が望まれる。本稿では、Bowers (1993, 2001) が提唱するPredicate Phraseを英文の中核に想定すればそのような文法体系を構築できること、特に、そのようなシステムの下では定形時制や非定形動詞の統語的な位置づけを簡潔に描写でき、さらに認知言語学的な視点を加えることで、非定形動詞の語形選択の原理を一定の合理性をもって説明できることを論証する。

キーワード：時制、Predicate、非定形動詞、時差、iconicity

### 1. はじめに

英語の統語的、意味的な構造を探ろうとする試みが精緻化の道をたどることは必然だが、英語の実用的な運用能力の習得を目指す一般の学習者に対して、言語学者レベルの知見をすべて提示する必要がないことも自明である。「学習者は論理的な概念や精緻な分析にまったく触れなくても、利益を享受することが望まれる ((S)tudents would hopefully benefit even if they are never exposed to theoretical concepts or explicit analyses (Langacker 2008: 85))」、あるいは「英語学習のための英文法と言語分析のための英文法はその目的が違うので、その質も違って当然である (今井2015: 224)」という立場から言えば、あらゆる文法現象を説明することを目指す厳格な文法体系とは別に、ある程度の精度で英文法の全体構造を説明できる「骨太な」学習英文法を構築することにも十分な社会的意義があるだろう。

本稿では、そのような動機から、学習者にとって特にその理解と把握に困

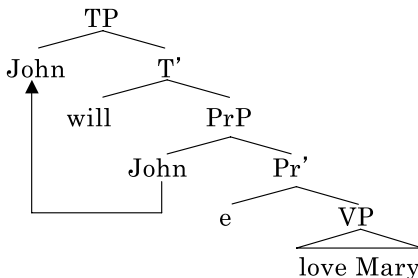
難が伴う非定形動詞（原形不定詞、分詞、to不定詞など）の形態的な選択の原理についての記述を試みる。具体的には、Bowers（1993, 2001）が提案する Predicate Phrase の概念に基づき、叙述を時制とは異なる階層の統語形式として提示し、さらに、従来は主文の動詞それぞれの「語法」として説明されてきた、いわゆるSVOC文型のCすなわち「補語」の位置に現れる非定形動詞の形態選択に対して認知言語学的な説明を与える。これにより、中級以上の学習者の知的好奇心を満足させられるような文法規則の記述が可能になり、言語理論の知見を英語学習の目的にも対応可能な形で学習英文法に効果的に反映させられることを示す。

## 2. Predicate Phrase

### 2.1 PrPの基本的な考え方

英語において定形時制を表す形態としては、定形be動詞、定形一般動詞、疑問文や否定文の助動詞do、法助動詞、完了形のhaveの5つがあり、それぞれに補部として後続する要素は多岐にわたる。しかしながら、Bowers（1993, 2001）で提案されているPredicate Phraseという概念を文法指導に取り入れることで、この一見複雑な構造に共通した骨格を提示することが可能となる。Bowersは文<sup>1</sup>の骨格をなすIP（Inflection Phrase、屈折句）の補部にPrPすなわちPredicate Phraseの存在を想定する。ここで、IPをTP（Tense Phrase、時制句）に置き換えて考えると、たとえばJohn will love Mary.という文の統語構造は、概略、(1) のように分析できる。

(1) Bowers (1993: 599 (12)) を一部改変し、簡略化<sup>2</sup>



同様の句構造は、下のように、定形一般動詞の文にも当てはめられる。便宜上、迂言的な助動詞didを時制辞として動詞から分離して表記する。

(2)  $[_{TP} \text{John did } [_{PrP} [_{VP} \text{eat a sandwich}]]]$ . (Bowers 2001: 303(9a)を改変)

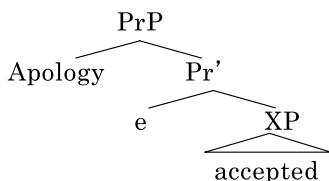
また、Bowersは例文を提示していないが、定形be動詞、完了形の文にも同じ構造を当てはめることができる。

(3)  $[_{TP} \text{Alex is } [_{PrP} [_{AP} \text{American}]]]$ .

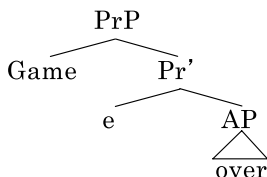
(4)  $[_{TP} \text{Alex has } [_{PrP} [_{XP} \text{arrived}]]]$  <sup>3</sup>.

PrPとは、端的に言えば、文から定形の時制辞を取り除いた残りの部分のことである。したがって、以下のような時制をもたない「文」にも適用できると思われる。

(5) Apology accepted.の統語構造



(6) Game over.の統語構造



PrPの主要部の機能は、指定部を占める名詞句と補部を占める要素との間に叙述関係を成立させることである。通常、PrPの主要部に顕現する形態素はな

いが、これは名詞句の後ろに何らかの語句を配置するだけで叙述が成立するという英語の性質を構造的に表しているからであり、不自然ではない。

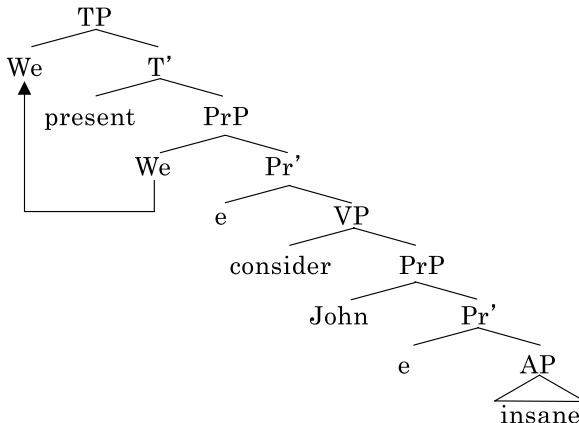
また、次のような倒置文において、時制辞の補部の内容を一語で代替するsoは、PrPの主要部に顕現している可能性があり、母語話者の直観の中にPrPが存在することを示唆している。

- (7) Mary can play the piano, and so can Linda.
- (8) Mary plays tennis, and so does Linda.
- (9) Mary is a nurse, and so is Linda.
- (10) Mary has arrived, and so has Linda.

## 2.2 PrPの連鎖

PrPによって、「主節とsmall clauseによる叙述の両方に統一的な構造的定義を与えられる（Both main clause and SC predication can be given a uniform structural definition. (Bowers 1993: 591)）」という点がきわめて重要である。Bowersはたとえば、いわゆるsmall clauseを含んだWe consider John insane.のような文を、以下のようにVPを挟んでPrPが複層的に連鎖するTP—PrP—VP—PrPという構造で分析する。

- (11) We consider John insane.の構造（Bowers 2001: 303(9b)）を改変



また、次の(12)のようなsmall clauseにしばしば現れるasについて、BowersはPrPの主要部に位置づけることを提案しているが、曖昧にされてきたこのタイプのasの統語的な位置づけを明確化する画期的な分析である。

(12) I regard John as crazy. (Bowers 1993: 596)

これに従えば、かつてベストセラーになったEzra Vogelの著書 *Japan As Number One* は、主要部をasが占めるPrPがそのままタイトルになっていると分析できる。

### 3. 知覚動詞の補部を占めるPrP

#### 3.1 aspectualな相違

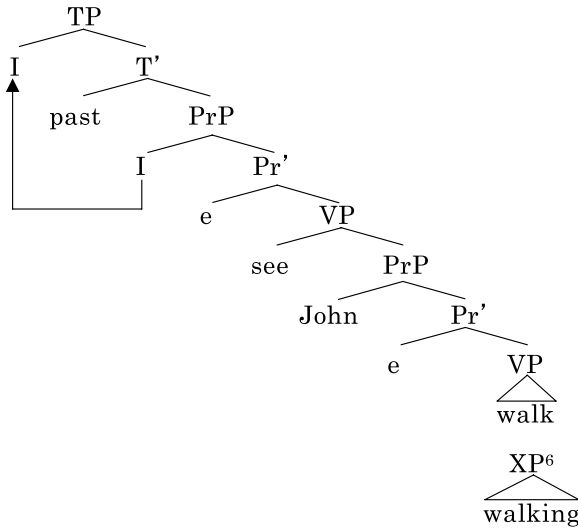
以下のように知覚動詞の補部に原形動詞と現在分詞が現れる例について、Declerck (1981) は、両者の相違をnonprogressive (非進行相) とprogressive (進行相) の間のaspectualな相違であるとしている<sup>4</sup>。

(13) I saw John walk. (Declerck 1981: 83)

(14) I saw John walking. (ibid.)

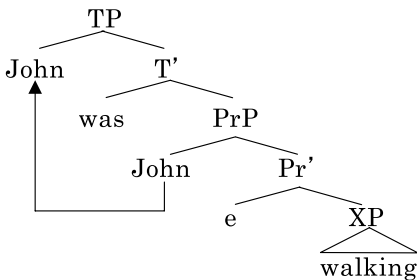
本稿は(13)と(14)の間にaspectualな相違があるという主張に同意し、さらに、sawの目的語であるJohn walkやJohn walkingはいずれも、初めから時制を持たないPredicate Phraseであると考え<sup>5</sup>。これらの構造は、(11)と同様、以下のように分析できる。原形不定詞のwalkについては、Bowers (2001: 303) に提示されている(主語略) see John eat a sandwichの分析と事実上同じものである。

(15) I saw John walk / walkingの統語構造



I saw John walkingのJohn walkingに進行相が表れているのだとすると、I saw John walkingのJohn walkingの部分と、典型的な進行相の文であるJohn was walkingは、ともに進行相を成立させる共通の構造的条件を満たしているはずである。ここで、John was walkingの統語構造を以下のように想定する。

(16) John was walking.の統語構造



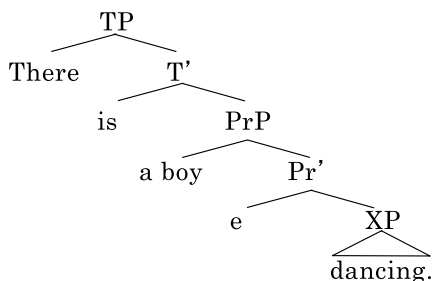
John was walkingのwalkingはTPの主要部wasによってc統御されているが、I saw John walkingのwalkingも同様にTPの主要部によってc統御されている。このことから、次の(17)の規則を仮定する。

(17) 時制句の主要部によってc統御された現在分詞は進行相を表す<sup>7</sup>。

この規則は、一般的に想定されている「be動詞 + 現在分詞」という進行相の形式が、あくまでも進行相の一形態にすぎないということ、つまり進行相においてbe動詞の存在は必須でない、ことを意味している。これにより、She kept singingのような表現形式で用いられる現在分詞も進行相とみなされることになり、この表現においてdoingに相当する動詞が動作動詞に限定される(ジーニアス英和辞典第4版)理由が明確になる。

また、次のような、There構文の意味上の主語の後ろに現れる現在分詞も(17)の条件を満たすため進行相となり、動作動詞に限られること(ibid.)が説明できる。

(18) There is a boy dancing.の統語構造



一方、下の(19)の下線部のようないわゆる分詞構文を主文全体のadjunctと考えると、時制句の主要部にc統御されない可能性がある<sup>8</sup>。この想定が正しいければ、(17)の規則により、分詞構文の現在分詞は進行相を表さないこと、またそのため、進行相に不適格とされる状態動詞が分詞構文には現れうることを構造的に説明できる。

(19) She remained silent, knowing the truth.

### 3.2 to不定詞の不適格性

学生が以下のように知覚動詞の補部にto不定詞を用いた誤った文を創出してしまうことがある。知覚動詞やto不定詞の使用頻度の高さを考えると、こうした文の不適格性について合理的な説明を与えることはきわめて重要である。

(20)\*I saw John to walk.

不定詞のtoが方向性や到達点を表す前置詞のtoに由来することは広く知られており、こうした歴史的背景に言及してto不定詞の用法を説明する試みは数多い。たとえば安藤（1975）は、「方向」を原義とするto不定詞は、本質的に“前望的”（prospective）なのである」としている。つまり、「メタファーによる空間から時間への意味の転写（砂川 2000: 105）」、「空間から時間への一方的な意味の拡張（松本2003:145）」が起きているのであり、そこには必然的に「時差」が含意されることになる。この点をDuffley（1992: 17）は、「toは原形不定詞の事象を他の何かに対して後ろの位置に配置する（*to situates the bare infinitive's event as an after-position with respect to something else*）」と表現している。こうした知見に基づけば、sawが表すような物理的知覚行為はその目的語となる事象と必然的に同時に生じるため、時差を含意するto不定詞が知覚動詞の補部を占める（20）のような文は不適格となる、という簡潔な説明が可能になる。

一方、I consider him to be honest. のようないわゆるECM構文に現れるto不定詞は、物理的な時差ではなく、話者の論理的な思考過程の中の「順序」、つまり旧情報としてのhimから新情報のhonestへと向かう順序、を表すと説明できる。considerがpropertyをs-selectする（Endo 1990）、すなわち意味的に選択する際、話者が目的語の人や事物をpropertyに結びつける思考過程を強調し、論理性・客観性を表現するためにto beを挿入すると考えられる<sup>9</sup>。

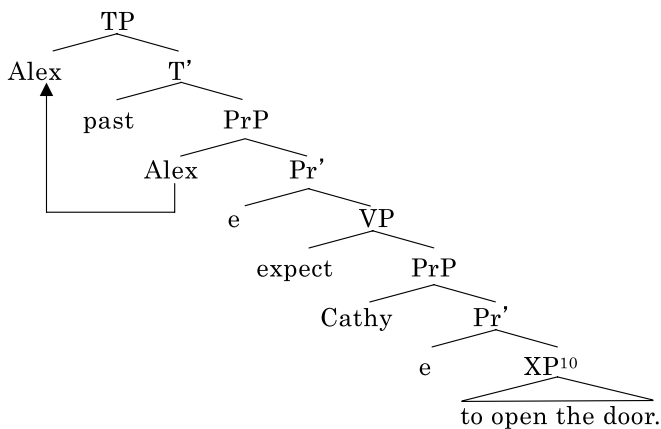
## 4. 願望を表す動詞の補部を占めるto不定詞

前節の例とは逆に、expectやwantなど、願望を表す動詞の補部においては、



to不定詞が適格となる。本稿ではこのような文に、(11)、(15)と同様の(21)の構造を与える。

(21) Alex expected Cathy to open the door.の統語構造



この場合、expectとopenの間にはexpectの意味から必然的に時差が含意されるためto不定詞が適格となる、と説明することができる。

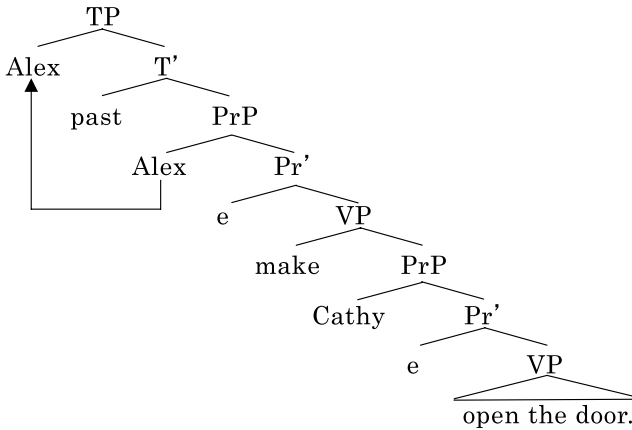
## 5. 使役動詞としてのmake

### 5.1 「作る」から「させる」へ

従来の学習英文法においては、makeを多義語にとらえ、「作る」に加えて使役動詞としての「させる」の意があるとし、「make + 名詞 + 原形動詞」という「公式」を恣意的に提示するという説明がなされていた。しかし近年、認知言語学の知見を盛り込んだ学習英文法が支持を集めつつあり、たとえば田中(2013: 242)は、使役動詞のmakeの意味を『「Aが何かをする」』という状況を作る』と表現している<sup>11</sup>。すなわち、makeの使役の意は、「作る」というmakeの原義に帰することができるという発想である。本稿においても、使役のmakeの意味をあくまでも「作る」であると想定し、「(ある事象)を作る」が使役のmakeの本質的な意味であると考えている。したがってそこには、テーブルや机といった物体(object)を作ることとの本質的な違いはなく、目的語に相当する

要素が、物体ではなく、PrPによって表現される事象 (event) であるという点が異なるだけである。Bowers (1993: 641) や同 (2001: 303) では、使役動詞haveやmakeの補部に生じる原形動詞句をPrPの補部に想定しているが、本稿でも上記のような観点からBowersにならい、使役動詞としてmakeを用いる文に (11)、(15)、(21) と同様の構造を想定する。

(22) Alex made Cathy open the door. の統語構造



## 5.2 現在分詞の不適合性

ところで学習者は、知覚動詞の補部で許される現在分詞がmakeの補部では次のように不適格になってしまう理由を問うだろう。

(23) \*Alex made Cathy opening the door.

これについては、以下のような解説を与えることができる。まず、進行相のCathy was opening the door.は「Cathyがドアを開けつつあった」の意であり、Cathyがドアを開けるという事象の断片を意味するに過ぎない。\*Alex made Cathy opening the door.のCathy opening the doorも、時制句の主要部にc統御されたopeningが進行相を表すことになるため、やはりCathyがドアを開けるという事象の断片に過ぎない。しかしながら、makeは「作る」の意であり、

その目的語である物体や事象を完成させることを含意するので、事象の全体像（すなわち完成）を表さない進行相がmakeの目的語の位置に現れると不自然になってしまう、という説明である。

### 5.3 to不定詞の不適格性

また、学習者はmakeの補部にto不定詞が現れない理由についても、学習英文法に何らかの説明を期待するだろう。

(24) \*Alex made Cathy to open the door.

これに関しては、次のように説明できる。たとえば、Alex made a speech.という文において、makeが表す「(演説)を作る」つまり「行う」という行為は、目的語である「演説」の第一声を発した瞬間に始まり、最後の一言を言い終えた瞬間に終わる。同様に、Alex made Cathy open the door.においてmadeが表す使役行為は、Cathyがドアを開け始めた瞬間に始まり、ドアを完全に開けきった瞬間に終了する。つまりmakeは補部の事象と同期 (synchronize) するため、時差を含意するto不定詞は不適格となることが予想されるのである。同じ「使役」動詞であっても、causeの場合は補部にto不定詞を要求する。これは、「原因」を原義とするcauseが使役の結果となる事象との間に時差を含意するからであろう。

### 5.4 過去分詞の不適格性

さらに英語力の高い学習者は、次の文のように過去分詞が使役のmakeの補部に許されない理由についても興味を抱くかもしれない。

(25) \*Alex made the door opened by Cathy.

というのも、知覚動詞の場合は、補部の動詞に原形と過去分詞のいずれも許容するからである。

(26) Alex saw Cathy open the door.

## (27) Alex saw the door opened by Cathy.

ここでは、言語には「五感、空間認知、運動感覚をはじめとする身体的な経験が反映されている」（山梨 2000: 4）という認知言語学の考え方に基づいた説明が有効である。より具体的には、iconicity（類像性）による説明が説得力を持つだろう。iconicityとは、概略、現実世界における距離や関係性の強弱が、言語内の距離感に反映される（Lakoff and Johnson 1980: 128–132）という発想である。つまり、「物理的な近さと、物体に影響を及ぼす能力との密接な関係（a tight relation between physical proximity and one's ability to affect an entity（Tyler and Evans 2001: 187）」がiconicityの原理を通して、(25)の非文法性をもたらすと考えられる。

たとえば、AlexがCathyにドアを開けさせる場合、AlexはまずCathyに対して言葉や仕草などで影響力を行使する。Alexの意を受けたCathyはドアに手をかけて、つまりドアに接触し物理的な作用を及ぼしてドアを開けることになる。つまり、「作用」の流れは以下ようになる。

	作用		作用		
(28) Alex	→	Cathy	→	the door	
	言葉		ノブを回す		
	身振り		ドアを押す		

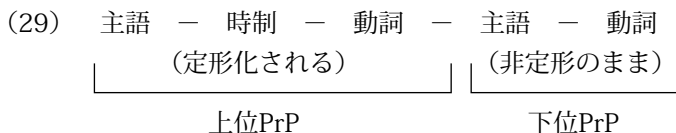
Alex made Cathy open the door.という語順はこの流れをそのまま反映しているために許容されるが、\*Alex made the door opened by Cathy. ではAlex → the door → Cathy という配置になってしまい「作用」の順序を反映しないため、母語話者はこの語順を直観的に回避する、という説明である。

興味深いことに、再帰代名詞を用いたmake oneself understood、make oneself heardなどの半ば慣用化した表現の場合には過去分詞が許容され、これは上述した説明の妥当性を証明する材料となる。たとえば、He made himself understood in French.の場合、主語は発音を工夫したり、単語の選択を変えるなど、自分自身に対して作用を及ぼした結果、相手に理解されるという成果を得る。そのため、Heの近くにhimselfがあるという語順はiconicityの観点から

意味との整合性を感じられるのである。

## 6. まとめ

本稿では、Bowersの提案に基づき、Predicate Phraseを文の統語構造に複層的に想定することにより、主節の動詞による叙述と非定形動詞による叙述を同じ枠組みの中でとらえられることをみた。さらにその中で、下層のPrPに現れる非定形動詞の形態選択を認知言語学的な視点から説明する方法についても検討した。これにより、定形動詞の目的語の位置で名詞句と非定形動詞が主語と述語の関係性をもつタイプの文については、2つの叙述構造が重なり合い、上位の述語動詞は時制を与えられて定形化し、下位の述語動詞は時制をもたないまま非定形動詞として現れる、というイメージで学習者に提示することができる。図式化すると以下ようになる。

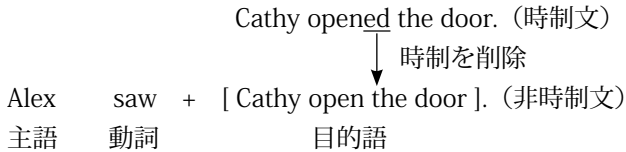


これは多くの学習者が習得に苦勞してきた、いわゆるSVOC文型のうち、OCの部分がVの目的語になっているタイプの文を、2つの「PrPの重なり合い」として理解できることを表しており、文法指導における1つの「難所」に明確な解決法を与える可能性を開くはずである。

ただし、学習英文法においては、PrPの概念を学習者が容易に理解できるようにアレンジする必要があるだろう。具体的には、PrPを「時制文から時制を消去した非時制文」として提示する方法が考えられる。PrPはそもそもはじめから時制を含まない概念であるから「時制を消去した」という説明は厳密に言えば誤りであるが、学習者にとってイメージしやすい「時制文」を基本に据えることは、「時制を含まない叙述」という概念を理解してもらうためには有効な手段だろう。たとえば、Alex saw Cathy open the door.については、まず、sawの目的語の位置にCathy opened the door.という時制文が挿入される、と説明する。次に、「1つの文には1つの時制しか許されない」という規則を提示

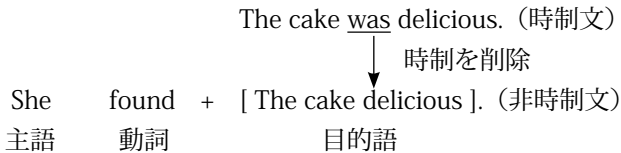
する。これは、文が時制辞の投射である、という生成文法の考え方を学習者向けに表現しなおしたものである。これに基づき、Cathy opened the door.の時制辞-edを削除する、という手順を示す。これをまとめると、以下のようになる。

(30)



また、She found the cake delicious.のように、下位PrPの補部を動詞以外の品詞が占める場合も同様に説明できる。

(31)



こうした手順で説明すれば、下位PrPの述部の品詞を気にすることなく統一的な統語構造を提示することができる。

なお、本稿では、Alex forced Cathy to open the door. の下線部のように単一の構成素をなすか否か疑わしいものについては説明を避けた<sup>12</sup>。これらをPrPを用いてどのように分析するかについては、慎重な検証が必要である。しかしながら、「学習文法はあくまで英語学習の効率を高め、効果を上げるためのもの（大津2012：8）」であるから「科学文法とは質が違う（ibid.）」という立場から見ると、この下線部が構成素をなすか否かよりも、なぜforceはto不定詞を選択するか、という形態選択の方が重要である。これに対しては、認知言語学的な視点から、forceは「力」が原義であり、物体に力を加えることと、その物体が動き出すことの間には（摩擦などにより）時差が生じるので、to不定詞が適格となる、という説明を与えられれば、学習英文法としては十分である

という考え方もできる。

生成文法の発展に伴い、その視野が「言語全般に共通する普遍性」へと移るにつれて抽象性が増し、英語に特化した学習文法への応用が難しくなってしまった。その結果、近年（特に、1990年代以降）は統語論の知見が学習文法に反映する形で考察されることはほとんどなくなりつつある。しかしながら、これまでの研究成果の中には、「普遍文法」という観点では「具体的・記述的すぎる」としても、学習や教育といった「応用」に特化して考えれば、本稿で示したPrPのように有用なものも数多い。そうした視点から、一般の学習者向けに、個別の言語事象をある程度俯瞰しまとめて把握することを可能にする「文法体系」の構築が可能なはずである。

学習英文法を構築するうえで、生成文法と認知言語学のどちらの言語観を選ぶか、という二者択一の発想は無意味であろう。両者の知見の中から有用なものを選び出して組み合わせ、学習者に最適のシステムを提示しよう、という動きが本格的な潮流となっていくことを強く期待する。

## 謝辞

本稿をまとめるにあたり、執筆者の注意が及ばなかった諸点について丁寧な示唆と助言を与えて下さった2名の査読者の方に深く感謝申し上げます。また、本稿の内容に関するディスカッションを通じて貴重な知見を賜った長谷川信子先生にも感謝の意を表したい。

## 注

\* 本稿はTagawa (2017) で論じた非定形動詞の形態選択の手法をBowers (1993, 2001) のPredicate Phraseと組み合わせることにより、わかりやすい学習英文法の構築を目指すものである。

- 1 本稿でいう「文」とは、記述された場合に大文字で始まり終止符で終わる「文」のうち、定形時制を1つだけ有するもの、すなわち伝統的な英文法でいう「単文」のことを指す。
- 2 Bowersは、VPの指定部にMaryを位置づけ、動詞loveがPrPの主要部に移動するという分析を行っているが、この操作は学習文法には複雑すぎるだろう。
- 3 このXPは主要部を過去分詞の接辞-enが占める「分詞句」を表す。
- 4 Parrot (2000: 147)にもほぼ同様の分析がみられる。Parrotはsawの補部に現れる原形

- 動詞と-ing形動詞について、'We can also use the bare infinitive to describe something which has been completed while we use the -ing form to show that something has started or is in progress'と述べている。
- 5 Bowers (1993, 2001) も知覚動詞の補部に現れる原形動詞句をPrPの補部に位置づけているが、現在分詞句についてはasに後続する場合のみを論じている。
  - 6 このXPは主要部を現在分詞の接辞-ingが占める「分詞句」を表す。
  - 7 「c統御」の概念を学習英文法にそのまま取り入れることは困難だろう。「同じ節内で時制がすでに示されていれば」などの表現を工夫する必要がある。
  - 8 この点について査読者から論証を求められたが、現時点で筆者は説得力のある論拠を提示できるほどの検証を行っていない。分詞構文のほかにも、「with+名詞+現在分詞」の構造や、名詞を限定修飾する現在分詞など、進行相を表さない現在分詞の用法は複数あり、これらすべてを（17）の規則から排除するには、何らかの制約を設ける必要があるかもしれない。
  - 9 この説明は、Imai et. al (1995) のBill believes Mary competentの方がBill believes Mary to be competent. よりも主観性が高い (more subjective)、つまりto不定詞が介在することで客観性が増す、という分析に基づいている。
  - 10 このXPは、不定詞標識toが主要部を占める「分詞句」を表す。本稿では、to不定詞が現在分詞と同様に前置詞句に由来すること (Visser 1966, Brinton 1988など)、また、不定詞標識toが直示的な時制をもたず、否定辞notの後ろに現れ、否定辞notと縮約形をつくらず、時制辞であるoughtや定形be動詞の直後に現れうること (Sawada:1985, 1994)、などの理由からこのtoを時制辞ではなく分詞の接辞に相当する形態素とみなしている。不定詞標識toを時制辞とみなさない議論については、Sawada, Tagawa (2002)、田川 (2005) を参照されたい。
  - 11 この発想は、She made John happyのようなsmall clauseにも適用できる。この場合のmakeは「ジョンが幸せであるという状況」を「作る」の意であり、その状況がJohn happyというPrPによって表現されている、と説明できる。
  - 12 Bowers (1993, 2001) では他動詞の目的語の後ろにその結果状態を表す形容詞が後続する「結果構文」や「persuade人 to 不定詞」の構造など、目的語とそれに続く要素が単純な構成素をなしていない例についても議論されている。



## 参考文献

- 安藤貞雄 (1975) 「意味の指導と意義素」『英語教育』14(9) pp.12-14
- 今井隆夫 (2015) 「英語学習におけるCognitive Motivation Model：母語話者のもつ英語感覚の学習を認知言語学の視点から考察」山梨正明・辻幸夫・西村義樹・坪井栄治郎 (編) 『認知言語学論考』 No.12. pp.207-260. 東京：ひつじ書房
- 大津由紀雄 (2012) 「学習英文法を考えるヒント」大津由紀雄 (編著) 『学習英文法を見直したい』 pp.2-9. 東京：研究社
- 砂川有里子 (2000) 「空間から時間へのメタファー：日本語の動詞と名詞の文法化」青木三郎・竹沢幸一 (編) 『空間表現と文法』 pp.105-142. 東京：くろしお出版
- 田川憲二郎 (2005) 「統語的アスペクトの表現形式としての英語to不定詞」『言語研究』128号 pp. 73-111
- 田中茂範 (2013) 『わかるから使えるへ：表現英文法』東京：コスモピア
- 松本曜 (2003) 『認知意味論』東京：大修館
- 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』東京：くろしお出版
- Bowers, John (1993) The syntax of predication. *Linguistic Inquiry* 24(4): 591-656.
- Bowers, John (2001) Predication. In *The handbook of contemporary syntactic theory*, eds. By Mark Baltin and Chris Collins. 299-333. Oxford: Blackwell.
- Brinton, Laurel J. (1988) *The development of English aspectual systems*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Declerck, Renaat (1981) On the role of progressive aspect in nonfinite conception verb complements. *Glossa* 15(1): 83-114.
- Duffley, Patrick J. (1992) *The English infinitive*. New York: Longman.
- Endo, Yoshio.(1990)On small clause and canonical structural realization. *English Linguistics* 7: 32-38.
- Imai, Kunihiko, Heizo Nakajima, Shigeo Tonoike, and Christopher D. Tancredi (1995) *Essentials of modern English grammar*. Tokyo: Kenkyusha.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. (2008) Cognitive grammar as a basis for language instruction. In *Handbook of cognitive linguistics and second language acquisition*, eds. By Peter Robinson and Nick C. Ellis. 66-88. New York: Routledge.
- Parrot, Martin (2000) *Grammar for English language teachers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sawada, Harumi (1985) The infinitival *to* and the aux system of English. *English Linguistics* 2: 184-201.

- Sawada, Harumi (1994) *Studies in English and Japanese auxiliaries: a multistratal approach*. Doctoral dissertation. Kansai Gaidai University.
- Tagawa, Kenjiro (2002) Infinitival *to* as an aspectual affix. *Studies in Language Sciences* 8: 1-22.
- Tagawa, Kenjiro (2017) How to present the accusative with infinitive/participle construction in the classroom. *Encounters* 5: 31-43.
- Tyler, Andrea and Vyvyan Evans (2001) The relation between experience, conceptual structure and meaning: non-temporal uses of tense and language teaching. In *Cognitive linguistic research*. 19.1. 63-108. eds. By René Dirven, Ronald W. Langacker, and John R. Taylor. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Visser, F. Th. (1966) *An historical syntax of the English language*. Leiden: E. J. Brill.

## 辞書

小西友七・南出康世（2006）『ジーニアス英和辞典』第4版 東京：大修館